

今の現状において、現場としては、英語教育の実施はとても難しいと世田谷区立赤堤小学校の校長吉村実先生は指摘する。世田谷区では、小学校・中学校の授業では、英語の授業ではなく「日本語」という授業を導入している。これは国語の授業のような正解を求めるものとは異なり、生徒個々の感受性を大切に、正解のないリズムの美しさなどを感じていく授業で、吉村先生は強く賛成していた。これにより生徒が自分の気持ちをしっかりと言葉で表現できるようになるからである。しかし、英語教育の導入については少し納得がいかない様子を見せた。その理由は主に2つあるという。まず1つ目に、現在の小学校の時間割に英語の時間を組み込むには、朝の15分間の時間か、7時間目を作る以外に方法がないからだ。さらにもう1つの理由は教員の質にあるという。いきなり英語教育を導入したところで、今まで英語を教えていなかった先生が英語を教えるのでうまく教えられない。そして英語が嫌いになってしまう生徒が増えてしまうのではないかという懸念も生じている。また最近のスマートフォンやSNSの発達により生徒たちは自分の気持ちや自分の考えを自分の言葉で表現する力が低くなり、そのストレスを暴力に訴えてしまう生徒が増えてしまっているという。自国の言語の日本語ですらうまく表現できていないのだ。そのため、そこにさらに英語も入ってきてしまった場合生徒はさらに混乱し、ストレスをためてしまうのではないかという懸念もある。また今現場の目線から考えて生徒に必要とされる授業は総合学習であるとの考えもあるとのことだ。実際英語は家に帰ってしまえば、使われることなく、話す習慣をつくることはほとんどない。その1つの理由は、英語の授業やALTの授業により近年では総合学習の時間はどんどん減っていることだ。昔は学級会活動と呼ばれ話し合いを行うようになっていた授業も今は担任の先生指導も含めた時間となってしまう、生徒が自分から考えたり、話したりする時間が減った。このような時間の減少が日本語で自分を表現できない生徒を作り出してしまう原因となったのだ。そして先生はこれらのことをすべて考慮してから英語教育の導入について考えるべきだと強調した。